

## 岩手医科大学歯学会第13回例会抄録

日時：昭和57年2月27日（土）午後1時30分

会場：岩手医科大学歯学部講堂

### 演題1 多形性腺腫における脂肪組織の病理組織学的検討

○佐島三重子, 武田泰典, 鈴木鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

過去12年間に当講座で扱った多形性腺腫の自験例35例についてこれらの脂肪組織を中心に検討し、以下の結論を得た。

脂肪組織の出現程度を4段階に分け、脂肪組織が全くみられないものを(-), わずかにみられるものを(±), 全断面の約1/4以下にみられるものを(+), 1/4以上みられるものを(++)とした。35例のうち9例(25.7%)に脂肪組織の出現がみられ、脂肪組織の出現の程度は(±)が2例, (+)が6例, (++)が1例であった。初診時平均年齢は全体の42.3才に対して、脂肪組織のみられた9症例の平均年齢は31.1才であった。発生部位の内訳は口蓋4例, 頬部3例, 口唇および耳下腺がそれぞれ1例であった。大きさでは拇指頭大, 胡桃大のものが多かった。症状の自覚より受診までの平均時間は、全体の3.2年に対して9例の平均は5.1年とやや長かった。

これら脂肪組織の認められたすべての症例では、上皮細胞の胞体内には脂肪が認められず間質成分として脂肪細胞がびまん性あるいは結節状に存在していた。脂肪組織増生の理由については、頬部, 軟口蓋, 口唇などに発生した症例に脂肪組織のみられたものが多く、これらはもとより豊富に存在する脂肪組織が腫瘍組織内に包括されることが一因と思われた。また症状の自覚より受診までの平均期間が、脂肪組織を伴う症例ではやや長かったことから、長期の経過を経たものでは腫瘍細胞の変性などにより補空的に脂肪組織が増生したとも考えられた。

また9症例のうち脂肪組織の著明にみられた28才女性例について、病理組織所見を中心に報告した。

### 演題2 歯科インプラント(チタン合金ブレード型)の臨床的成績と実験病理学的成績について

○梅原正年, 板垣光信, 佐島三重子  
武田泰典, 鈴木鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年歯科インプラントを手掛ける臨床家が急速に増え、かつ歯科インプラントの確実な臨床的效果と成功を期待できると信じる臨床家が増えてきた。併し反面慎重な臨床家であればある程今後の成り行きを注意深く見守っていることと思う。インプラントを原点に帰って考えてみるといろいろの問題が挙げられるが、特にインプラントと組織反応を考えてみても骨とインプラントの関係は手術後、創傷の治癒に伴って種々の影響で骨の吸収と添加が起り、常に大なり小なり線維性結合織膜で覆われる。このインプラントを取りまく薄層の線維性結合織膜が将来理想的な歯根膜のショック、アブソバー的役割を果たすようになると思う。併しインプラント頸部と上皮の問題は歯肉組織がポスト頸部をどの程度に封鎖できるかがインプラントの泣きどころとされており、今回この問題についていささかの実験を行ってみた。すなわち、通法にに従ったワンピースブレードインプラント埋入法と、我々が考案したツウピースブレードインプラントとを比較する目的で成犬を使って実験病理学的観察を行い、更に臨床で応用した例で比較した。

結果はワンピースブレードインプラントよりツウピースブレードインプラントの方が極めて良好で、いずれも大なり小なり炎症性肉芽組織が認められるが、深部へ向っての歯肉上皮の侵入増殖はワンピースブレードインプラントよりツウピースブレードインプラントの方が軽度で止っていた、このことは、ツウピースブレードインプラント後4年あるいは5年経過した臨床例のX線写真において、ワンピースブレードインプラント例にみられるような頸部における垂直方向の骨吸